

grâce と disgrâce

——修道女の手紙

朝比奈 誼

ポール = ロワヤルを語るにあたって grâce (訳語は文脈に応じ、以下の本文中に随時示す) の問題を避けてとおることはむずかしい。

モンテルランは周知のとおり『ポール = ロワヤル』の中で、権力を笠に着た大司教による配下の修道女たちのいじめやら、院内の権力争いやら、俗世間の目を引きやすい芝居仕立てを疑似餌にして、二人の修道女の上昇と下降という内面のドラマに観客を引きこもうとした。これを grâce 「恩寵」を受ける者 (la Sœur Françoise) とそれを失う者 (la Sœur Angélique de Saint-Jean) の対置というふうに見ることもできる。終幕近く、つぎの両者のやりとりがその証拠である。

修道女フランソワーズ：…こうして私の魂が根底的な変革をとげた矢先に…

修道女アンジェリック：そんな変革は自然の衝動にすぎないわ。そこに grâce 「恩寵」はかかわっていませんよ¹⁾。

この否定は、彼女の指導的立場からすれば、信仰生活の先達による、いかにも訳知りの謙虚な忠告であるように見える。しかし、芝居の流れから見れば、神を見失いつつある者、神に見放されたという負い目に悩む者の僻み以外ではありえない。自らの落ち込みがはげしいだけに、後進の昂ぶりに水をさしたくなる、何かにつけ理性的との評判の高い彼女が、その勢いをとめられないのである。

いずれにせよ、無神論者を自認するモンテルランでさえ信仰の問題に踏みこまずにいられなかったということになる。しかも、両者のコントラストは非キリスト信者の目にも現前するほど見事にドラマ化されていて、この劇作の成否を左右する要と思われるが、後者が実在の人物であるだけに、

実像との食い違いを問題にされる余地を残した。

そもそも、修道女アンジェリック・ド・サン＝ジャン（1624-1684）（以下、特に断らぬかぎり、アンジェリックと略）の内面に秘められた葛藤にモンテルランを誘ったのがサント＝ブーヴの大著であり、作劇にあたりこれに多くを負っていることは本人がつとに明かにしている。たしかに、その影響は随所に認められるものの、実像の忠実な再現とは認めがたい、というのが、モンテルラン演劇研究の第一人者で、かつポール＝ロワヤル友の会の有力メンバーでもあるブラン教授の見方である²⁾。教授は、理知的で冷たい外見とは裏腹に悩める情熱的魂の持ち主だとするサント＝ブーヴのアンジェリック解釈がいかにもロマン派好みなら、批評家が発掘した彼女の手記 *Relation de Captivité* 『幽囚の記』³⁾ ほかを精読した結果として劇作家が作り上げた、神を見失うかどうかの崖淵に立った修道女というのも、「虚無の騎士」⁴⁾ の我田引水がすぎると説くのである。なるほど、実在の彼女は信仰の危機を体験したにせよ、見事にそれを克服し、1年におよぶ孤独な幽囚生活に耐えぬき、晩年は高德の誉れたかい修道院長として知られたのにたいし、翻って劇中のアンジェリックは、厳めしい外面の内側にニヒリズムの空洞をかかえこむ人物にとどまるという意味では、『死せる女王』のフェラントや『サンチャゴ騎士団長』のアルヴァロと同類としか思えないのである。

本稿はモンテルランの解釈の是非を論じるものではない。ただ、彼女が残した手紙を頼りに、彼女の grâce 観の一端を垣間見ようと思ったばかりである。因みに上記の論考によれば、モンテルランは手紙を渉猟したとは思えないとあるが、現在ポール＝ロワヤル図書館に所蔵されている未刊書簡集（手稿）のすくなくとも一部を作劇にあたって参照したことは疑えないようだ。⁵⁾

＊

きっかけは、彼女の実兄 Simon Arnauld d'Andilly, Marquis de Pomponne (1618-1699)（以下、ポンボンヌ侯と略）の disgrâce 「失寵」である。むろん、その前提として grâce 「寵愛」の時期がなければならない。話の順序として、国王ルイ十四世の寵愛を受けたいきさつを述べよう。

彼は先王以来、国王側近としてもランブイエ侯爵夫人のサロンの人気者としても知られた父 Robert Arnauld d'Andilly (1588-1674) の跡をつい

だ、根っからの宮廷人だった。宮廷の観察者サン＝シモンは書いている。

ポンボンヌ侯はナポリとカタロニアで軍政監察官を歴任したが、どこに行っても英知と節度を発揮し上首尾を納めたので、厳父の友人、自ら獲得した友人知己にも助けられ、1665年にはスウェーデン大使に選ばれた。現地に3年滞在したあと、オランダ大使に転じた。いずれも首尾よく任務をはたした。その結果、スウェーデンに戻り、そこでオーストリア一家の手練手管と戦った末、1671年、フランスにとって有益なかの名高い北方同盟の結成にこぎつけた。国王はこれをいたく嘉みせられ、数ヶ月後、大臣で外務卿のリオンヌ殿が亡くなると、ポンボンヌ侯にまさる後任はいないとお考えになった。⁶⁾

ここで、1665年という時期に国王から信任を得られたことが注目される。というのも、モンテルランの作品が示すように、前年の1664年8月、ポール＝ロワヤル修道院は国王の意を受けたパリ大司教の命令で、12名の追放者を出したが、その中にはポンボンヌ侯の叔母と妹二人（その一人がアンジェリック）が含まれていたからである。ルイ十四世がイエズス会の使喚もあってこの女子修道院の背後に反逆者の影を見ていたことを考えると、ポンボンヌ侯の外交手腕に対する国王の期待がよほど大きかったことになる。それを端的に示す証拠として、ルイ十四世が在スウェーデンのポンボンヌ侯宛てに送った親書のコピーがサント＝ブーヴによって紹介されている。

ヴェルサイユにて、1671年9月5日

この書簡を受けとって、そなたの気持ちはさまざまだろう。驚き、喜び、当惑が同時にそなたを襲うだろう。そなたは期待していまいから、予が北欧の果てにいるそなたを國務卿に任じようとは。これほど目覚ましい抜擢、フランス全土からの選択、これを知ればそなたのような者は胸打たれるにちがいないし、予の命令でそなたに与えられる金子は、さまざまな資質ほどには財産に恵まれぬ者をしばし当惑させるかもしれない。こう前置きした上で、手短に、予がそなたのために何をする所存か、説明しよう。リオンヌが亡くなったゆえ、その地位をそなたが埋めてほしいのだ。しかし襲職権を持つ子息に報酬を与えねばならぬ。予が定めた額は80万リーヴルに達するが、そのうち休職の手当てという形で30

万を与えるから、そなたの分はその残額になる。しかし、支払いの便宜上、そなたに 50 万リーヴルの年金証書を与える。それを差し出せば、数年後、多額の借財の窮状からそなたを救い出すだけの金額を予はそなたに与えよう。以上がそなたに予がすることであり、予がそなたに望むことだ。とりあえず、スエーデンの任務に精励し、早く予の許に戻れるようにしてほしい。後任を派遣する。今の地位にそなたが留まるあいだ、配下として役立つはずだ。その上で出立し、予の許にもどり、予のそなたに対する gráce「厚遇」に十全に報いてほしい。この処遇を小さいものと思わぬ者は多いのだ。それはそなたの人物に対する予の評価を十分に示しており、予が多言を勞するにおよぶまい。この書状の持参人の申すことを信用し、ただちに、そなたの任務に関する予の質問への回答を持たせて返すように。

ルイ⁷

この gráce が 8 年後になぜ disgrâce を招いたか、それについては後述することにして、とりあえずサン＝シモンの人物評を引き、国王の信任に関する一つの裏づけとしておく。

まっすぐで公正で卓越した判断力に特にすぐれ、熟慮するにせよ行動するにせよ万事をじっくりと、しかし遅滞なくおこなう、謙虚で、穏健で、質素で、堅くて曇りのない信仰心の持ち主だった。眼差しには優しさで才気が現れ、顔全体には英知と純真さがあふれていた。交渉にあたって優位に立つ芸、器用さ、不思議な才能。相手を怒らせずに己の目的を遂げるだけの巧さ、柔軟さ。公務で相手を魅惑する優しさ、辛抱強さ。加えて、国益や何事にもゆるぎない王冠の威力を堅持するための毅然たる、さらに必要とあれば傲然たる態度。これらの長所のせいで、これまで折衝にあたった諸国でそうだったように各国の大臣に愛された。どこにおいても等しく評価され、信頼を勝ち取っていた。礼儀正しく、慰勸で、交渉の時以外は大臣ぶることはけっしてなく、宮廷では鍾愛されていたが、そこでの生活ぶりは折り目正しく、むらがなく、贅沢にも儉約にも偏らず、忙事の気晴らしはもっぱら家族や友人や読書によるばかり。人当たりはやわらかくて機知にあふれ、話ぶりは本人が望んだわけではないのに、いたって教訓に富んでいた。彼の頭の中、彼の口にあっては万事が整然と進み、何一つもたつくことがなく、しかも彼の平静さが乱れ

ることもない。⁸⁾

サン＝シモンの人物描写は全般に多かれ少なかれ偏見でひずんでいることを警戒した方がよい。特に引用箇所は回想録の一節として、故人を偲ぶ形をとっている上、この後に、サン＝シモンと折り合いの悪いコルベールやルーヴォワの人物評がつづくから、ことさら美化されていることを考えあわせる必要があるだろう。だが、その分を割り引いて受け取るにしても、要するに、二代目として先代の顔の広さを生かせる境遇に恵まれたばかりでなく、みずからも人付き合いのすこぶる上手な才子だったのだろう。bonhomme の愛称で親しまれた父親の信用に加えて、愛想がよくて敵を作らぬ息子の生き方が、ポール＝ロワヤルの悪印象を帳消しにし、彼の出世を支えたと考えてよからう。

しかも、サン＝シモンの最良目とも断定できない。ボンボンヌ侯の人柄に好感をもち、才能を評価していたのはけっして彼一人にとどまらなかったからだ。それを示す格好の証拠がセヴィニエ夫人の一連の手紙である。

セシル・ガジエは著書 *Les Belles Amies de Port-Royal* 『ポール＝ロワヤルを愛した貴婦人』に当時の社交界の花形女性 8 名を登場させているが、セヴィニエ夫人の記述に全体の約三分の一を割いた上、「アルノー・ド・ボンボンヌはセヴィニエ家常連の一人であった」⁹⁾ として、その関わりの深さを強調している。

因みに両者の親交をいやがうえにも深めたのが名高いフーケ財務卿の disgrâce だったことも興味をひく。恩人とともに失脚し、宮廷を退いて自領ボンボンヌに蟄居していた侯爵に、同じく前財務卿と親しかったセヴィニエ夫人はフーケ裁判の模様をパリから逐一手紙で知らせたのである。その数は現存するものだけで 14 通にのぼっている。

それだけに、1 年後にボンボンヌ侯の disgrâce が解けた時はもとより、上記の外務卿就任に際しては、夫人の喜びは格別だったろう。グリニャン夫人宛てにこう書いている。

ボンボンヌ様が大臣、外務卿になられたのをご覧になった父君ダンデイ様のお喜びようはお分かりでしょう。たしかに、これほど見事な人選について王様を称えねばなりません。あの方はスエーデンにいらしたのですが、王様はあの方のことを思いつかれ、リオヌ様の後任を託され、その任官に必要な一切の財政処置をおとりになりました。あの方の

ことです、この地位につかれた後、どれほどすばらしい功績をあげられぬはざがありましょうか。男も女も友人たるもの、どんな喜びを味わぬはざがありましょうか。その喜びに私がどれほど関わっているか、お分かりですね。このような人選については、王様を称える頌歌を一篇、よろこんで捧げたいくらいです。¹⁰⁾

筆者の興奮ぶりがしのばれる筆致であるが、それだけに 8 年後の *disgrâce* による打撃も大きかったにちがいない。同じグリニャン夫人に宛てた 1679 年 11 月 22 日（水）付けの手紙はつぎのように書き出されている。

あなたをびっくりさせ、無念がらせる知らせです。ポンポンヌ様が失脚なさいました。土曜の夜、ポンポンヌから上京なさったところ、70 万フランになるお役目を解くという王命をお受けになったのです。大臣として受けてこられた 2 万フランの年金は今後も頂ける由、王様があの方の忠節に満足していらっしゃる徴としてお決めになった由です。この挨拶をなさったのはコルベール様で、こうせざるをえないのは残念だとおっしゃいました。ポンポンヌ様が、王様に拝謁してどんな過失のせいでこの青天の霹靂を身にうけたか、直々に伺うわけにいかぬものかお尋ねになったところ、拝謁はまかりならぬとのお返事でした。そこで、文書で限りない遺憾の意とともに、何がもとで *disgrâce* 「ご不興」を招いたのか心当たりがない旨をお伝えになりました。また大家族のことを話題になさり、8 名の子女の養育にご配慮賜うように懇願なさいました。¹¹⁾

前日の金曜日にセヴィニエ夫人はポンポンヌの屋敷で彼の義妹のヴァン夫人を含む常連と楽しい一夕を過ごした矢先だった。おりしも外交課題として王太子とバヴァリア大公女との婚約成立が期待されていた。ポンポンヌ侯は役目柄いち早くその吉報を手にしたにもかかわらず、国王の待つサン＝ジェルマンに直行せず、夜会に付き合った。その隙をついてコルベールが国王に情報を提供したため、外務卿は面目を失墜した、ということらしい。サント＝ブーヴはルイ十四世の回想録を引用し、国王自身の言葉から、ポンポンヌの無能を結論づけている¹²⁾。これにたいし、サン＝シモンは知人の肩をもとうとして、コルベールとルーヴォワ、二人の大臣が手を結んだ陰謀の犠牲になったとする¹³⁾。サント＝ブーヴはこの説に信をおか

ず、なまじ本人と付き合いがあったため、その会話の魅力に惑わされて、ポンポンヌという人物の本質を見そこなったものと断じている。たしかに、サン＝シモンの見方の偏りはすでに見たとおりで、国王を怒らせ、解任にいたったについては、ポンポンヌ本人に落ち度がなかったはずがない。ただ、それにしても、1691年、ルーヴォワの死とともに復職していることもまた動かしたい事実であり、サント＝ブーヴのポンポンヌ侯爵もまた公正とは言い切れまい。

他方、ロングヴィル夫人の死去（この年の4月）によりポール＝ロワヤル修道院が最大の後ろ盾を失ったことを重視する見方もある¹⁴⁾。事実、この後にわかにポール＝ロワヤルに対する国王の敵意が露骨になり、1664年当時の緊張関係を再現する形になっていたから、「イエズス会以上にイエズス会的」¹⁵⁾とまでいわれたルイ十四世がアルノー一族の大臣を忌避したことは十分に考えられるのであり、そうなればポンポンヌ侯の職務怠慢は単なる口実にすぎないことになる。

いずれにせよ、disgrâceの原因究明は本題からそれる。セヴィニエ夫人の手紙に戻ろう。彼女は友人一家をとつぜん襲った不幸という見方に徹している。

ポンポンヌ様の従僕が日曜の九時にヴァン夫人のお部屋に着きましたが、この男の歩き方があまりに異常でしたし、その表情が極端に変わっていたので、夫人はてっきりポンポンヌ様の訃報を届けにきたのだとお思いになってしまいました。それですから、ただ失脚されたただけと判ったとたん、ほっとなさったのでした¹⁶⁾。

彼女は姉のポンポンヌ夫人に知らせ、泣き騒ぐ子供たちを残してパリに向い、侯爵に合流した。夜、一家をセヴィニエ夫人は慰問に訪れ、面会謝絶というのに、中に通った。

ポンポンヌ様は私を抱擁されましたが、一言もお話になれません。ご夫人がたは涙を抑えることができませんし、私も泣いてしまいました。あなただってあの場にいあわせたら、涙を抑えられなかったでしょう。辛い光景でした。金曜日にポンポンヌ邸でお別れした時との違いがひどく、それを思うとますます胸が熱くなりました。あの模様をあなたに再現してみせることはとても私にはできません。お気の毒にも、ヴァン夫

人は一昨日はあんなにも華やかでいらしたのに、同一人物とは思えません。本当に同一人物とは思えないのです。発熱が二週間つづいたとしても、あれほど面変わりすることはありますまい。夫人はあなたのことを話題になさり、あなたなら自分たちの辛さやボンボンヌの立場を身にしみて感じてくれると思うとおっしゃいました。その点は間違いないと申しておきました¹⁷⁾。

彼女の報告はえんえんとつづき、ほとんど1通全体を占める。それでも足りず、翌々日の金曜日の手紙にも余震が尾をひいている。直後の動揺はおさまり、ボンボンヌ侯周辺の動静を伝えるだけでなく、ルーヴォワ邸で催された知人の華やかな婚礼にも話題をひろげる余裕を見せるのだが、それにつけてもつぎのような感懷を洩らさずにはいられない。

あちらには（ルーヴォワ邸）春が呼び返されておりました。いたるところオレンジの花が咲き、箱植えの花に満ちていました。でも、現在は反対側にこんなにずっしりと傾いている天秤が、わずかながら悲しみの雰囲気を発散させていて、今度の暗い出来事がなければあまりに行過ぎてしまったにちがいない歓喜をわずかながら和らげているのでした。すばらしいと思わないこと？この世では万事がどんなに混ぜ合わされていることか、何事も純なままでいられないし、同じ位置にずっといられるわけでもないのです。私のいう意味があなたにはすっかりお分かりだと思います。本当に、今起こりつつあることすべてについておしゃべりしたら、止まらないでしょう¹⁸⁾。

この瞑想的な語り口はさらにつぎの11月29日（水）の手紙にひきつがれるとともに、展開をみせる。

レディギエール夫人¹⁹⁾ がポール＝ロワヤルの霊母アンジェリック、つまりお気の毒な大臣の妹御に手紙をお出しになり、その返信を見せてくださいました。実に立派な文面なので、写しをとって同封します。修道女が修道女として口をきき考える様を目のあたりにしたのは、これがはじめてです。これまでに会った修道女といえば、親戚の娘の縁談に大騒ぎするとか、姪が縁違いといって絶望するとか、復讐心に燃えるとか、中傷が大好きだとか、欲得づくだとか、偏見にこりかたまっている

とか、そんな手合いばかりです。それに反し、本当に、心底から世を捨てた修道女に出会ったことは今までついぞありませんでした。この類稀な手紙で私がどんなに嬉しい思いをしたか、同じ喜びをあなたも味わってください²⁰⁾。

ブレーヤード版書簡集の編者もいうように、この手紙は現存しない²¹⁾。ただし、その内容を推し量る材料がないわけではない。というのも、前述のアンジェリックの書簡集²²⁾には問題の disgrâce に触発されて同じころに書かれた手紙が 8 通含まれているからである。その一部はサント = ブーヴの目に触れたとみえ、引用されてもいるが、断片的であるばかりか、アンジェリックの人間性に不満を募らせていた筆者の気分そのままに「セヴィニエ夫人ほど夢中になれる代物ではない」という感想つきなので、あまり参考にならない。そこで、以下に 8 通すべて²³⁾を訳出して、セヴィニエ夫人の評価の正当性を判断する材料を提供したいと思う。

手紙 1 Madame Fontpertuis²⁴⁾ 宛て、1679 年 11 月 21 日

神が兄ポンポンヌに賜った grâce について、私以外の者があなたにお知らせするようなことがあってはなりません。兄は disgrâce により鎖から解かれたのですが、私としてはそれが本人にとって不意で謂れのないものであったのと同じくらい、有益なものであるよう、神に祈っております。国王が兄から 7000 リーヴルと 20000 リーヴルの役職を取り上げる旨を伝達なさったのです。こうして兄は多くの危険から解放されたわけです。でも、何にもならないでしょう、もしも神が兄に grâce を賜り、みずからの幸福を評価し、この disgrâce の原因はどうやら真実を愛する方々との関係にあるということを嘆かぬように仕向けてくださらないとしたら。それ以外の原因を見ぬくことはできませんし、まさにそれが彼の幸福となりました。この知らせの意味について、お友達の他の事件の場合のようにショックをお受けにならないように願っております。なにしろ、あなたは兄の危険をあれほど正当に判断なさっていたのですもの、これを喜んでくださることでしょう。

手紙 2 Madame 宛て、1679 年 11 月 21 日

このような時にわざわざ私どもを慰めていただき、身に余る光榮でございます。お蔭さまで私個人は慰めを必要としておりません。なにしろ、こ

の災難自体に私は慰めの理由を認めるからでございます。これは、兄についての神の思召しが平安であって悲嘆ではないこと、兄のために世俗的報酬よりも堅固な何かを神が用意してくださっていることの **marque** であるように思われますから。私はそんなことではないかと思っておりました、兄の **disgrâce** が意外であったのと同じく思いがけず兄の身の上に生じた今度の **faveur** 「特惠」こそ一つの **marque** ではあるまいか、と。これこそ文字通り、私どもが俗世の栄光や至福すべてにたいして持つように聖霊がお望みの見方でございます。それがどこで起こりえたにせよ、朝開き夜には萎れる草花に似ております。物事を信仰の立場で見、私どもを欺く感覚には従わぬという態度にすこしでも慣れれば、どちらにせよ驚くべきではありません。お嬢様がこうした出来事についてよくお考えになり、この世の空しさを学んでくださると思うと、この上なく嬉しゅうございます。これはすばらしい知恵でございますが、神が刷りこんでくださらないことには頭に入りません。しかし、**grâce** を受けるだけで、不幸な体験を必要とせずに納得できれば、こんな幸せはございません。とはいえ、とこしえの救いの希望はいかにも素敵なことでございますから、その希望の光が、どんな形にせよ、どちらの方からにせよ、いかに大きな逆運やいかに辛い **disgrâce** の只中にせよ、見えてくるだけで、大きな幸せに恵まれていると思うべきでございます。そしてまさにこれこそ、今度の出来事につき私が兄にくだした判断なのでございます。兄が私の希望どおり、この神の思召しをしっかりと受け止めてくれさえしたら、の話でございますが。

……

手紙 3 Mademoiselle 宛て、1679 年 11 月 21 日

私がこの際慰めを必要としていたとしたら、あなたは他のどなたにもまして慰めを与えてくださったことになりましょう。というのも、今度の俗世の出来事について賢明でキリスト教徒にふさわしい考察の末、あなたが以下の確信に行きつかれたことをうれしく思うからです、すなわち、そこには執着するほどのことは何ひとつないけれど、栄耀栄華の中にある人がそうせずにいるのはいかにも難しいので、何かの拍子に起きた奇禍により、はかない栄光への愛に心を縛りつける鎖を断ち切って、その結果、天国に向うというもっと大きな財産づくりを目指す自由が当人に与えられる、これこそ、神によれば真の幸福である、という確信です。あなたは俗世に戻られてまだ 10 ヶ月にしかないのに、俗世には堅固なものは一つもな

いことを学ぶのに十分なだけの失墜を目のあたりにされましたね。お姉様のご逝去といい、私の兄の *disgrâce* といい、わずかの間に立てつづけに教えてくれたことは、どれほど長生きしようと同じで、俗世でたえず目にすることばかりです。青春、美貌、富、寵愛、どれも夢の中のことに思えるものばかりです。死を招く事故や *disgrâce* は、夢を見て幸福だと思っている人々を覚醒させます。すると、眠りつつ夢に見ていた楽しい思い出はもう跡形もありません。反対に、残ったのは人を不幸にする悲しみばかりなのです。もっとも、神はそれを利用して、救いたいと思し召す人々を神の方に呼び返そうとなさいます。そして、神は大いなる慈しみをもって、彼らをこれまで信頼を寄せていた仲間から引き離し、とこしえの富への愛をお授けになります。この世の空しさについて神がお授けになるこうしたすばらしい教えを活用してください。そして、「俗世は聖霊を受け入れることができない」言いかえれば「俗世への愛があなたの心からとこしえに駆逐されぬかぎり、聖霊とイエス・キリストがそこに入ることもなく、ましてや、そこに留まることはない」というイエス・キリストのお言葉を、よくよくお考えください。これまでのところは神がそうした不幸からあなたを守ってくださったものと願っておりますし、あなたのためにその *grâce* を保持され、さらには増やされるよう、神に心をこめてお願いいたします。……

手紙 4 Madame la Duchesse de Luynes²⁵⁾ 宛て、1679 年 11 月 23 日

俗世の *disgrâce* についてお慰めいただきましたが、遁世者はそんな光栄を期待すべきではありませんまい。それだけに、嘆きの対象を限るべき限界を超えてまで、悲しむ者たちとともに悲しんでくださるこの上なく優しいお心遣いには、なおのこと恐縮いたしております。と申しますのも、奥方様は、今度のような損失で涙を催してはならぬ者たちにまでご同情くださっているからです。その者たちは承知しております、我らの嘆きの対象は、己一個の罪か、さもなければ、我らの愛する者たちが巡り合わせにより俗世にこだわり天国への道を見失うという状況に陥った時の危険か、二つに一つであることを。こんなことは始終起こることです。兄があゝの地位に就いて以来、私はそのことをずっと案じておりました。破滅の例があんなにも多いからです。兄はまだ救われたわけではありませんが、今度のごとは兄にとっていずれ救われるという **marque** であります。したがって、私にとっては希望の始まりであり、その希望に私は慰められております。

遠慮なくこんな口の利き方をいたしますのも、私は存じ上げているからです、奥方様は神の王国の言葉を学ぼうとお望みで、それとは異なる言葉を話さぬことをお喜びになりますし、また奥方様の場合、どんなことも俗世の錯覚の誤りを悟る助けになるということ。人はそのことを、今度の出来事を通じて知り、同時に蔑視することを学ぶのです。奥方様の用心遣いの有難味を胸に受け止めるにつけ、私にできる最大のお礼は、奥方様にこの俗世蔑視の気持ちを神がお授けくださるようお願いことです。

手紙 5 Mademoiselle de Courcelles²⁶⁾ 宛て、1679 年 11 月 23 日

時めいていた頃からかねがね気の毒に思っていた人物の *disgrâce* について私がどんな態度で臨みそうか、あなたには容易にお分かりでしょう。野心がない時、人はわずかな幸せで満足するものです。私は兄に関してはとても大きな野心を持っているものですから、彼がイエス・キリストの王国にあって最低の地位に落とされたと知ったら、苦悩のどん底に陥ったことでしょう。そこにはあんなに大勢の近親者がいて、いずれも徳の高さから引き上げられた、というより、当人にはまったくかわりなく功德を授けてくださる神の慈しみによって、彼等に神が賜った *grâces* から判断させていただくかぎり、その王国のかなり高い地位に迎えられているからです。それにしても、あなたが私ども一家の出来事にわざわざ関心を寄せてくださったことに、いたく恐縮しております。あなたの友情の深さを感じて、感謝の気持ちでいっぱいになるのは今日はじまったことではありません。

なにとぞ私の友情の堅さもあなたのに負けないことを信じてください。それをあなたに示す機会を私どもにお与え下さればうれしゅうございます。

手紙 6 Madame la Duchesse de la Feuillade²⁷⁾ 宛て、

1679 年 11 月 29 日

わざわざお便り賜り、二重に慰められました。と申すのも、兄の *disgrâce* について披瀝なさったご意見があらわしているのは、奥方様が俗世をきちんと正しく判断なさっていること、そして次のようなお考えによってご自分の苦難と病気の中でも自立なさっているということでございますから。すなわち、神は地獄落ちさせたくないとお望みの人々を慈しみによって苦難に遭わされる、そしてひたすら最愛の人の幸福だけを神に求めている

人々に神が災厄ばかりお授けになるのは、災厄そのものが真の特恵である **marque** であり、神は物事を私ども以上に正しく判断なさるので、災厄をそれに遭わせた人々にとって、神の摂理により失われた健康あるいは厚遇や財産以上に有益なものにしてくださる、というお考えでございます。私はこの真理にすっかり信服しておりますので、兄の身の上に起こったばかりのことを悔やむことはどうしてもできませんでした。もとより兄の苦しみには同情しておりますが、兄は、奥方様がわざわざ私宛てに書いてくださったかくも堅固で真実の準則を神のお導きで経験し信服するようになるまで、苦しみつづけるでしょう。

〔偽の徳は偽の幸福よりいっそう空しいものでございます。神は、私どもが己の弱さを感じるままにほうっておかれる時、私どもに grâce を賜り、自分たちの貧困さを心から自覚し、私どもの力の源である神にすがるように仕向けてくださっているものでございます。というのも、人の力からいきなりキリストの力に達することはできないからでございます。神が私どもから己自身の esprit 「靈気」を抜き取り、私どもを本来の塵ほこりに還元なさることが必要なものでございます。私どもが己自身の虚無に戻った時に、神は御自分の esprit を送って新しい存在として私どもを創造し、地表全体を更新なさるのでございます。〕²⁸⁾

ですから、苦難のなかにあって私どもが神に求めねばならないのは、この苦難によって謙虚にならせてください、ということでございます。というのも、神は謙虚な者にしか grâce を賜らないからでございます。肉体の激痛は常に、長続きする時には耐えがたいものでございます。私どもは絶えず神にお願いいたしましょう、神がそれを取り除こうと望まれぬかぎり、自らの苦痛を信仰にふさわしく活用させてください、と。何しろ、どんな犠牲を払おうとも、救われねばならないからでございます。そして、私どもが悔い改めぬかぎり、皆滅びるという福音書の掟は変更できません。ですから、人生の苦悩の中にこそ、真の安息に通じる道を認めることにより、最大の慰めが見つかるのでございます。でも真の安息には、俗世にそれを見つければと望む者も、狭い道に入る決心のできない者も、けっして行きつけますまい。その狭い道こそ、そこに向う唯一の道だからでございます。神は grâce のお導きにより、災厄や disgrâce を彼等に送りこんで、その道に入らざるをえないようになさるのですが、彼等がそれらを進んで受け入れるなら、悔い改めに変わり得るのでございます。神により置かれた状況を私どもは以上のように活用しようと励んでおりますが、お蔭で私ども

は限りなく安らかな心境でいられると痛感しておりますので、苦しんでいらっしゃる事が確かに察しられる方々に対しても、同じ考えに同調していただきたく願っているでございます。

手紙 7 Monsieur l'Abbé Bourgeois²⁹⁾宛て, 1679年12月2日

信仰の言葉に育てられ、その言語を理解できる者は幸せの極みです。大部分の人はそれを知らず、夷狄の言語と見なすかもしれぬというのに、神の慈しみによって、私の心には真理の言葉が幼いころから深くしみこんでおりますので³⁰⁾、まるで生まれつき備わっていたかのように馴染んでおりまして、〔頭を少しも痛めずに、兄の *disgrâce*こそ真の *grâce* であると確信しております。私としては、兄にたいする俗世の厚遇について、かねてから彼の救済をすっかり危うくし、救済の希望をほぼ無にしまうリスクと見なしておりました。それで、この厚遇が終わっても、当人は花が散って実をつけ始めた樹木のようなものだと思っております。なるほど以前ほど美しくはないけれど、はるかに多くの喜びを与える樹木なのです。なにしろ、なかば豊年の保障を得たわけですから。〕³¹⁾ 兄についても同様です。兄が悲嘆に陥ったことは私にもわかります、兄はそれで苦しんでおりますから。でも、この種の悲しみは、神が救済の果実を实らせてくださるという希望にとって、とても大きな慰めの材料になります。ただ、それには神父様のお助けが必要で、祈りを捧げてくださいますよう、私からも謹んでお願いいたします。というのも、〔花が散ってからずいぶん時は経ったけれど、十分に熟した果実を収穫するまでには、まだまだ多くのことを恐れねばならないからです。私のさし当てるの気がかりは、まさにそのことなのです。しかし、神の慈しみに浴することを希望してもよろしいでしょう。なにしろ、神はその業をお始めになったのですから、最後まで続けてくださるでしょう〕³¹⁾ し、生者も死者もともども祈っておりますから、神がかくも強い指の試練によって諭された、俗世の幸福への蔑視を、兄は身につけることでしょう。

神父様は兄について「彼は敬虔な気持を持ちつづけていた」という評判を耳にされた旨お知らせくださいましたが、それはずっと以前から真実のように思えたことです。でも、兄がああ地位に留まっておりましたら、いつまでその気持が続いたことでしょうか。兄が声を失わないうちに、神が兄の祈りを聞き届けてくださったのは、何という僥倖でしょう。溺れて、さんざん助けを求めたあげく、しまいには叫べなくなってしまう人のよう

なものなのでから。

当面は兄に協力いたしましょう。そして、神父様、神の御前で私どもの祈りをご支持くださり、この一家全員に、これから先は、わが主イエス・キリストの十字架をおいて他にはいかなる名誉も栄光も求めぬ、そういう grâce を得させてくださいませ。

手紙 8 Mademoiselle de Bagnols³²⁾ 宛て、1679 年 12 月 12 日

かくも異常な出来事について、十分すぎるほどのお言葉をいただいてしまいました、私としてはまったく必要としていなかったのですが。しかし、率直なところ、他の方のご挨拶は余計な感じだったのに、あなたからは何らかの友情の **marque** を期待していて、私に必要なものに思われていました。私にとっては、それこそ一つの disgrâce だったでしょう、もしあなたが私の抱いているような友情にたいして冷淡なままでいらしたとしたら。私の友情にはそちらからいくらかは見返りがあってもよいでしょう。というのも、私はあなたのこととなると、いささかも冷淡になれるはずがないので、私にこれほど身近な事柄なのだからあなたも関わってくれるかもしれないと期待していたからです。私はまちがっていませんでした。すこしも知らなかったのですが、ご病気のせいで手紙をいただけなかったとおっしゃるのですから。そんなわけで、あなたが一番先に手紙をくださったと仮定した場合と変わらぬ謝意を捧げねばなりませんし、それを心から申します。今回のかくも突然の運命の変化に触発されてあなたがなさった考察はいかにも賢明で、正しいので、あなたがご自分の理性にしたがってつぎのような結論に達することができたとしても、私は辛い思いをした以上に、嬉しく思ったでしょう。つまり、逃したのが不本意なものでも、立派に捨てねばならない、という結論です。「世は過ぎ去ります。世に属する欲も過ぎ去ります。」（「ヨハネの第一の手紙」2-17）

あなたが私の考えとして述べていらっしゃることを否定するわけにいきません、事実、今度の disgrâce を私は大切に思っている人物にとっての一つの特典と見なしたのですから。それに、私の愛する人びとすべてについても同じ考えに立つでしょう、神が彼等の虚栄や強欲の対象を奪い取って、ひたすら神だけを崇拜するように仕組んでくださったとしたら。

この後どうなるかはお分かりでしょう。でも、条件が一つあります。彼等に私が望むのは、彼等を苦しめることなく、彼等を救うことなのです。ですから、disgrâce を指して私が幸福と呼ぶのは、神が disgrâce に

あった当人の目をひらいて、みすみす自分に不利なものに執着させる呪縛を解いてくださる場合だけです。というのも、何人も疑わないでしょうから、この世からしてすでに不幸になりはじめ、さらにあの世で永遠に不幸であることこそ、不幸の極みである、と。

お知らせくださった異様な死のことは私どもすでに承知しておりました。疑ってはなりません、神はこうした出来事を通じてあなたに話しかけていらっしゃるのです。それなのに、あなたはいつ神にお答えになるおつもりですか。神はあなたにそうやって命じておられるのです。「バビロンを去れ、その廢墟に包まれないように」と。かくも差し迫った警告を受けながら、一日一日決意を先送りなさるとしたら、あなたにはもうどんな言い訳も残りますまい。残念ながら、今年も終わろうとしているのに、まだ何も実行されていません。まもなく始まる年こそ、より実り多いものでありますように。新年をイエス・キリストとともに始めてください。あなたの心を潔く切り捨てるのです、それで血が出るにしても。というのも、救いを思う者は、内なる感情からも、外なる行いからも、キリストに適わぬものの一切を一度は切り捨てねばならないからです。イエス・キリストのために憎むべきエジプトの荒廢のもとを断ちましょう。この決意を先延ばしすればするほど、実行はそれだけ難しくなるでしょう。私どもの方でも祈りの機会を倍にして、あなたをお助けしなければなりません。それこそ新年に私が心からやりたいと望んでいることなのです。というのも、お便りをいただいた時にすぐこの手紙を書き始めたのに、今はもう大晦日だからですが、ちょっと体調をくずして手紙が書けなかった上に、御生誕祭その他で一刻も自由にならなかったのです。

紙面の関係で、手紙の詳細な検討は別の機会にゆずり、ここではこの修道女の *disgrâce* / *grâce* 観の特徴を二、三指摘して、結論にかえることにする。

まず第一に注目すべきは、「兄の *disgrâce*こそ真の *grâce*である」(手紙 7) に集約される逆説的な見方である。いうまでもなく、これは単なる言葉の遊びではない。セヴィニエ夫人をはじめとする人々にとって *le monde* の中心は国王にあり、その *bonnes grâces* なり *faveur*こそが文字通り死活を左右する。ところが、アンジェリックの住む世界の中心はむしろ神である。その彼女にとって *grâce*とは「神が魂の救済を助けるために人に与える超自然的な援助」(ラールス仏語大辞典)、すなわち「恩寵」「神

の恵み」以外ではありえず、そうなれば disgrâce が「栄光への愛に心を縛りつける鎖」(手紙 3)「から解かれた」(手紙 1)「幸福」(手紙 8)を意味するのは当然だろう。ところで、彼女は「時めいていた頃からかねがね気の毒に思っていた」(手紙 6)と書いているが、これは負け惜しみではない。というのも、すでに大臣就任の際に、祝福の手紙を寄越した相手を咎め、救済の道から逸れたことを悲しむという趣旨の手紙を書いていたからである。³³⁾

これから考えれば、セヴィニエ夫人がこれと同じ趣旨と思われる手紙の文面から、アンジェリックは完全に le monde を捨てた修道女であると見たのは正しい。それを認めた上でいうのだが、le monde を捨てたとはいっても、人間的な感情を完全に超越した境地に達しているわけではないことを見逃すべきではあるまい。「disgrâceの原因は真実を愛する方々との関係にある」(手紙 1)として、暗にポール＝ロワヤルとの関係が失脚の要因であることを示唆しているが、裏を返せば、兄その人の側に手落ちを認めまいとする態度の現われであり、かすかながらも身内を庇おうとする意識をかぎつけないわけにはいかない。

そのつもりで読むと、「多くの近親者」が「いずれも徳の高さから」キリストの王国の高い地位についたとするくだり(手紙 5)にはアルノー家一流の家門意識が漂う。その後に「というより、当人にはまったくかわりなく功德を授けてくださる神の慈しみ」という言いなおしがつづくだけに、いっそうその感がつよいように思われる。

さらに気になるのは、手紙 8 である。「慰めはいらぬ」とする他の手紙の論調とはちがって、ここでは相手の便りを待ちわびる人の訴えが聞かれ、あまつさえ仮定文にせよ相手の無音を disgrâce と見なしただろうとある。この語が他の個所ではいずれも兄の失寵の意味で用いられているだけに、なおさら相手にたいする人間的執着を感じ取らぬわけにはいかない。ただ、パニョルス嬢との関係についてはすでに別の機会に論じたので、ここでは触れない。

最後に、全部で 5 回(手紙 2 に 2 回のほか、同 4, 6, 8)も出てくる marque について一言。見ての通り 8 の場合以外は「神がわれらに救いの手をさしのべてくださっている徴」の意味で用いられている。この執拗さを素直に受け取れば、彼女の信仰の強さを示す証しであることはいうまでもない。だが、私としては、最後のパニョルス嬢宛ての用例を拡張して、苛酷な状況の中で強い支えを求める彼女の追い詰められた心境を読みとり

たい誘惑に駆られる。これは、迫害からも信仰からも離れたところにいる私の無責任な勘ぐりにすぎないのだろうか。ここまで来たところで、しみじみ局外者の限界を感じないわけにはいかない。

注

- 1) Montherlant : *Port-Royal*, in *Théâtre*, Bibliothèque de la Pléiade, 1972, p. 912
- 2) André Blanc : *Du roman au théâtre, Angélique de Saint-Jean à travers Sainte-Beuve et Montherlant*, Chroniques de Port-Royal No 34, pp. 47-60
- 3) モンテルランに助言を与えた Louis Cognet 師の編集で戯曲の版元 Gallimard 書店から 1954 年に刊行された。
- 4) モンテルランのこと。文集 *Mors et Vita* (1932) 所収の *Explicit Mysteriorum* に由来する。
- 5) 拙稿『修道女の未刊書簡』, 「立教大学フランス文学」20 号, 215 頁参照。
- 6) Saint-Simon : *Mémoires*, Edition établie par Yves Coirault, Bibliothèque de la Pléiade, 1983, tome I, p. 653
- 7) Sainte-Beuve : *Port-Royal*, Bibliothèque de la Pléiade, 1955, tome III, p. 28 なお, 年金証書 *brevet de retenue* はポンボンヌ侯およびその遺産相続者が後に彼の後任者に少なくとも同額を請求する権利を認めるものであった。これが担保になり, この額までの借金が容易になった。cf. Madame de Sévigné : *Correspondance*, Bibliothèque de la Pléiade, 1983, tome I, p. 1169
- 8) Saint-Simon, 前掲書, pp. 653-654
- 9) Cécile Gazier : *Les Belles Amies de Port-Royal*, Perrin, 1930, p. 157
- 10) Madame de Sévigné, 前掲書, tome I, p. 344
- 11) Madamede Sévigné, 前掲書, tome II, p. 739
- 12) Sainte-Beuve, 前掲書, tome III, p. 190
- 13) Saint-Simon, 前掲書, pp. 655-657
- 14) Emile Jacques : *Les Années d'exil d'Antoine Arnauld* (1679-1694), Bibliothèque de la Revue d'Histoire Ecclésiastique Fascicule 63 p. 114
- 15) 同上, p. 33
- 16) Madame de Sévigné, 前掲書, tome II, p. 740
- 17) 同上
- 18) 同上, p. 746
- 19) Duchesse de Lesdiguières, Paule de Gondi : ポール = ロワヤルの先代修道院長 la Mère Du Fargis ならびに Retz 枢機卿の姪, 庇護者の一人。
- 20) 同上, p. 748

- 21) 同上, p. 1447
- 22) Sainte-Beuve, 前掲書, tome II, pp. 735-736 note
- 23) ジレ嬢の手書き書簡の整理番号で CCCCXCII から CCCCXCIX までに相当する。
- 24) Angélique Crespín du Vivier (?-1714), 夫の Jacques Angran (?-1674), Fontpertuis (ロワール河沿いの町ボージャンシー近郊) 領主はメス高等法院の評定官などを歴任した平貴族。彼女はポール = ロワヤル, 特にアンジェリックと親交があり, 潜伏中の Antoine Arnauld に避難先を提供したことで知られる。アンジェリックの書簡の名宛人として最も頻度が高い。
- 25) ポール = ロワヤルの信奉者として知られる公爵 Louis-Charles d'Albert de Luynes (1620 ?-1690) の二人目の妻, Anne de Rohan (?-1684)。娘たちを修練女としてポール = ロワヤル修道院に預けていたが, コルベール大臣の示唆で3月に退去させられたばかりだった。
- 26) ポール = ロワヤルの信奉者で, 後に Val-de-Grâce 修道院に隠棲した。アンジェリックの文通相手の一人。
- 27) Charlotte Gouffier de Roannez (1633-1683)。パスカルの親友の一人, 兄ロアネーズ公の感化でポール = ロワヤルに入り, 修道女を志したが, 王命で退院を余儀なくされたことで知られる。後に, ラ・ファイヤード元帥 (ロアネーズ公爵領を引き継ぎ, 公爵を名乗る) に嫁したが, 子供の夭折がつづき, みずからも病気がちで結婚生活は不幸つづきだったようだ。
- 28) セヴィニエ夫人の手紙に関係づけられてはいないが, [] 内はサント = ブーヴに引用あり。前掲書, tome II, p. 735
- 29) Jean Bourgeois (1604-1687) ソルボンヌの神学博士。メルシ = ディユ修道院長。ポール = ロワヤルの支持者として知られる。
- 30) アンジェリックは六歳からポール = ロワヤルで育ち, 生涯俗世を知らずに終わった。
- 31) [] 内の部分のみ控えめに注の形でサント = ブーヴに引用あり。前掲書, tome II, pp. 735-736 note
- 32) ポール = ロワヤルを信奉する父の遺志で, 早くから修道院に入れられ, アンジェリックの指導を受けたが, 強制的に退院させられた。上記の拙稿『修道女の未刊書簡』を参照のこと。
- 33) 上記の書簡集 CCXIII, ペリエ夫人宛て, 1671 年 11 月 23 日付け。